

おさえることのできない奔流

——『アルトゥロ・ウイの興隆』に見る現実と錯覚の境目——

摂津 隆 信

2005年6月に新国立劇場で上演されたベルリナー・アンサンブル公演『アルトゥロ・ウイの興隆』（ブレヒト原作）は、1995年に初演されたハイナー・ミュラーの新演出によるものであった。この新演出は初演当時から大絶賛の嵐を巻き起こし、10年間にわたってベルリナー・アンサンブルの重要レパートリーとなっていた。その人気を支えた主要要素として、ハイナー・ミュラーの斬新な演出と、主役を務めたマルティン・ヴトケの圧倒的な演技力が挙げられる。

たとえば、ブレヒトの原作ではプロローグとエピローグが重要な役割を果たしており、プロローグにおいて各登場人物の紹介を行うことでナチスとの関わりを明確にし、エピローグではナチズムという「怪物」に対する批判が表明された。だがミュラー演出ではエピローグをカットし、本来プロローグであったシーンをエピローグへと置換した。また、ブレヒト演劇で多用される、状況説明のための字幕も用いられず、その代わりに『魔王』や『トリスタンとイゾルデ』、ヴェルディの『オテッロ』にフランツ・リストの『プレリユード』、そしてアメリカのロックバンドのペーパーレイス等の音楽によって、そのシーンで問題となっている事柄を観客にイメージさせた。このような例から見てとれるのは、『アルトゥロ・ウイ』の作品世界を必ずしもナチスやヒトラー、ドイツ・オーストリアに限定する必要はない、というミュラーとヴトケの意図である。ウイをヒトラーという具体的な歴史的事実から切り離すことで、政治と犯罪との連関を客観的に理解させると同時に、劇を劇として楽しませるという二重の意図が隠されているのである。このような意図はしかし、ヴトケの演技によって極めて複雑な様相を帯びてくる。彼の驚異的な演技力によって観客は彼の芝居に取りこまれる。このとき観客の目には、ヴトケ／ウイ／ヒトラーが英雄として映るのであり、このような事態を決定的にするのが最後の場面、ヴトケの観客に向けた投げキスである。観客を取り込みつつ挑発するという一見背反する行為をヴトケの演技は可能にしているのだが、同時にそれは、このように演技に巻き込まれ、かつ魅了された状態にある観客にとってブレヒトの言う「異化」はどのような力を持ちうるのか、演劇を観るという行為は一体どういうことなのか、という根本的な問いをも観客に投げかけている。これは、演劇を劇場という非日常的空間のみに収斂させず、演劇をきっかけにして〈いま、ここ〉の問題を観客に思考させるブレヒト的技法の継承であり、その技法を未来に向けて批判的に発展させていくミュラー流ブレヒト異化の一形式なのである。